

自費で初狩停車場開設運動を起す

明治三十四年七月、村会議員半数改選に付、主願（停車場開設運動）を主張のために候補者を名義、有志の賛成を請い、幸に賛助を得て、議員に当選す。主願は、停車場新設出願を貫徹の目的を達し度く、必要の材料を日夜調査、やや確定したるに付、翌三十五年二月、村有志、奥脇賢造、富田德音両氏を自徳寺内に招待、同寺と寶林寺住職立会いの上にて懇議、諒解を得て、同月二十八日停車場新設出願に付、臨時村会召集の議を村長に申請、直ちに村長は翌三月一日、村会召集を達し、同日 出席議員八名、村長事故欠席、助役小林峯太郎代理議長席に着き開会、依つて出願の理由を審議の上、委員に当選、運動費は主願者において自弁の発議あり、これを承認す。

村会の承認を得て、直ちに上京、葉袋代議士に面会援助を請い、富田道生君に出願書起案を依頼し、出願書出来に付、葉袋代議士に検閲を乞い、同月十五日富田德音同行、通信省へ出願

書を奉呈。翌十六日葉袋代議士の援助の結果、鉄道局長増田禮作殿に局内にて面会、同官より 目下工事進行中に付、甲府まで貫通の上は何分の詮議可致旨申達され、同十九日帰村。その旨村長に報告、同廿日村会議員有志者の主催にて慰勞宴会あり。その後主官古川坂二郎鉄道局技師渡仏し、三十七年二月より、日露戦役となり、停車場設置を出願する時宜無し、追々遷延失望。然るに明治四十年八月二十五日、未曾有の大水害を羅り、全村過半を滅し、之が復旧方法を深慮するも何等幸案なく、茲に前年出願したる停車場を再願新設を得て、此交通機関を利用し、石材その他の物件を搬出する時は、相当の復旧を得るものと確心、県知事の官舎へ村会議員小林庸夫君同行、知事閣下に面会具申候処、ご賛成被成下「早速出願書差出せ」との御言葉を受け、帰村。同十二月二十五日出願書へ、小林龜麿氏の敷地献納願書を添え通信大臣に奉呈。依頼東京市内に滞在、各主務官へ望月小太郎代議士の援助を受け訪問、災害実況を陳情、同

情を得て、翌四十一年三月末日、停車場設置敷地測量として、筒井技師出張相成たるも、敷地地主不承認のために遂に延引。その後種々順序を以つて漸く敷地献納となり、停車場工事四十二年一月に出来。同二月十日開業式を挙げらる。是出願の初年より四十三年まで九年間の星霜を終、総経費千四百余円を自弁す。大正十二年五月、国民新聞紙上に山梨県下十九ヶ駅各停車場の沿革成績を調査、各駅毎に記載あり、その成績にて県下において拾萬円以上を収入する停車場六駅にして、是に加わりたるは不肖の欣喜とす。

明治三十八年一月、村長に就任時、日露戦役中事務多端、殊に三十年來、村税出納計算未納、巨額整理す。同三十九年、戦役も米国の尽力により平和となり、国民安定、生徒増加し、校舍教室も不足し、校舍増築の必要となり、村会を召集、審議の結果、増築に決定、自己の所有建築用材及び附属敷石・表門踏石・石橋一式を寄付、不足用材屋根瓦等の費は村税中より支出とし、経費審議決定。同年十月より着手、翌四十年四月竣功。五月二十一日開校式挙行す。

同年八月二十五日、未曾有の大水害、全村過半被害その惨状甚だし。罹災者救護に尽力し、復興事業として停車場施設再願、堤防工事等、通信省又は山梨県へ陳情して、その詮議を相待ち四十一年十月、村長を退職す。四十二年三月、本村堤防工事実施に付、県主務課より指名、罹災者救助の旨意により、県庁予算額にて指名請負を囑託せらる。被害者に工事作業を従事せしめ大いに其の目的を達す。其の工事金額老萬千八百四十四円。

明治三十九年四月一日、日露戦役中、村長在職中の功により、勲八等白色桐葉賞を賞勳局より賜る。明治四十三年四月、北都留郡長より特使にて同郡廣里村臨時代理村長を被命、其の用は、小学校位置改正問題にて止むを得ざる事情に付拜任。同月末日より就職、同村の事務に従事。五月に至り郡長より訓令を以つて花咲校を廃止、東西廣里小学校設置し、位置、東

校は大月、西校は眞木と達せられ、この訓令の旨村会議員を召集発表す。依つて東校位置並びに新築予算同会の決議を経て県の認可を得て同七月同村代理村長を辞退す。大正十二年二月職務完了、村長より村誌編纂を囑託せられ編纂中。大正十二年九月一日午前七時頃まで雨降り九時より晴天なり、十一時五十八分に未曾有の大地震突発、その後十二時間に人体に感じたる余震百十四回以上ありたると言ふ。其の震源地は東京南二十六里、即ち伊豆大島の東方四・五里の海底の由（尚記事は東京市麹町の由（尚記事は東京市麹町雄弁社発行震災記より）余震今尚時々あり、本県下も震源地に接近するほど強震、本郡も本村以東は段々被害多し。地震後、同夜は上野原・神戸・側子その他の部落は、道路又は畑中に板畳を敷き三昼夜家に入らず、一日より在郷軍人・青年団総出勤夜警し、同夜八時ごろ東方の空一円に紅色となり、神戸方面にて望遠鏡で見ると、八王子辺の火事と言ふ。翌日東京電燈駒橋発電所の電話通信にて始めて東京市の大火なるを知る。震災突発直ちに電信電話、汽車交通機関一切不通、南都留郡は本郡より甚だし、瓦屋根は落下し田畑その他石垣は大崩壊、牛蒡畑の牛蒡が地中より振るいだされたるあり。これ強震なることを知る。天災地変も廻るものによ。明治四十年八月の大水害は本村内、立川原・上野原・中丸・藤澤の各部落甚し、今回は神戸・側子・日影等の部落甚し。本村被害数被害戸数 全壊 五、半壊 四、破損 五十、計 五九戸 倉庫 破損 三、工場 全壊 三、半壊 六、破損 五十 計五九 本村被害大なるは、小林龜麿氏にして、酒造庫二棟、文庫倉一棟、大破損清酒五十四石流失す。

孝正は公職多忙にも係らず、觀世流謡曲や遠州流茶道免許皆伝、書画も嗜み、長男克喜を、甲府中学・開成中学を経て蔵前高等工業（現東京工大）に進学させるなど教育熱心な文化人でもあった。 執筆者 井上文次郎